

## トビイロウンカ

### ○ 被害と発生生態

主に8月以降に増殖するため秋ウンカとも呼ばれ、その名のとおり鳶色（茶褐色）をしている。イネの株元に生息し、多発すると突然イネが枯死倒伏し水田の中に穴があいたようになるいわゆる「坪枯れ」をおこす。この「坪枯れ」によりイネの稔実は極度に悪くなり品質が低下し収量は激減する。

トビイロウンカは国内では越冬せず、毎年、通常6月下旬～7月中旬の梅雨時期に下層ジェット気流に乗って大陸から東シナ海を渡って成虫が飛来する。飛来した成虫はイネに産卵し、ほぼ1か月で1世代を送り山口県では3世代を過ごす。8月上旬以降に現れる第2世代以降、短翅型成虫が多くなると次の幼虫が急激に増殖しやすくなる。また、高温、少雨の気象条件で増殖率が高くなる。

この虫は株元で増殖するため、ほ場をよく観察しないと「坪枯れ」がおこるまで多発生に気づかないことが多い。株際の発生によく注意し、早期発見に努めることが重要である。

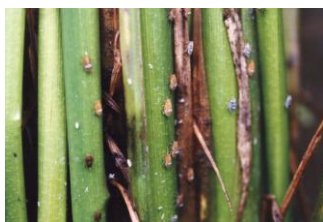
### ○ 防除方法

#### （ア）耕種的・物理的防除

- ・密植や多窒素による過繁茂を避ける。
- ・早期落水を避ける。

#### （イ）薬剤防除

- ・育苗箱に薬剤を施用することで長期間、飛来した虫を防除する。また、年により発生時期、発生量は大きく変動するので長期予報等の発生予察情報を参考にほ場での発生動向を確認し、適期防除に努める。
- ・本田初期（6月下旬～7月中旬）に100株当たり10頭以上発見されれば防除を行う。
- ・7月下旬～8月上旬に100株当たり20頭以上発見されれば、直ちに防除を行う。
- ・8月中旬～9月上旬の増殖期に株当たり5頭以上発見されれば、直ちに防除を行う。
- ・地際近くの生息部位へは薬剤が到達しにくくなるので、株元によくかかるよう丁寧に散布する。
- ・年間に複数回飛来することが多く、ほ場内には卵～成虫まで複数のステージが同時に存在することが多い。薬剤散布後は防除効果を確認し必要に応じて追加防除する。
- ・一部の薬剤では薬剤感受性の低下の事例も報告されているため、長期持続型箱施用剤を使用したほ場でも発生密度を確認する。



株元で混発したウンカ類



坪枯れ



長翅型成虫



短翅型成虫